

印象に残った新作家

国枝史郎

青空文庫

本誌五月号の探偵創作の中、小舟勝二氏の作「昇降機」を面白く——というよりも夫れ以上に敬服して読みました。

(1) よく昇降機の性質を知っていて夫れを活用したこと (2) 「——四階。客無し。運転継続——五階。停止」というようなテキパキしていて新鮮で要領のよい動的描写

(3) 橋本が昇降機へ飛び付いてから死ぬ迄の物凄い光景等々、実に旨いものだと思いました。全体が手堅く、緊密であるのも嬉しく思いました。小舟氏の作はこれ一つしか読んだことはありませんが、これ一つだけで充分に手腕ある作家だということが感じられました。

雑誌「苦楽」に掲載された本田緒生氏の時代捕物「夜桜お絹」も私を喜ばせた作でありました。自由な筆致もよく、時代物なのに一向こだわらずに英語を入れた大胆さも苦にならず、いや却つて効果的であり、全体がフツクリして軟味のあるのも快く思いました。林不忘氏の作とは又別趣の味があり、現代物ばかりで無く、こういう時代物にも才気縦横であることが証拠立てられ、氏のために祝福した次第であります。雑誌「苦楽」がこれを呼び物にしたのは洵に理だと思えました。「疑問の黒樫」は完結してから「『疑問の黒樫』

細評」というようなものを書いて見たいと思つて居ります。兎とに角かく大変な人気であり、人氣のあるのは当然至極と思つて居ります。寸鉄殺人的の短篇で盛んに読者を威嚇していた小酒井博士が、こういう大がかりな、そうして何処となく余悠があつてフツクリして、そうして如何にも日本的な作を作ろうとは最初の中は誰もが想像しなかつたことでしょう。博士はマイクrofフォンで……「探偵小説の行詰り云々」と探偵小説がどうやら行詰まつたような口吻くちふりを洩らして居りましたが、「疑問の黒棒」はそれを裏切つて居ります。こういう作がある以上探偵小説は行詰つて居りません。で博士に抗議をして、如上の言葉は失言として取り消しを願うことに致しましょう。

少しく時期が遠退きました。が、「サンデー毎日」一月二十三日号に掲載された懸賞探偵小説甲種当選山口海旋風氏の作「レシデントの時計」を私の氣附いた範囲では、何処でもまだ誰も批評していなかったのは不思議な事だと思つて居ります。あれは勝れた作でもあり又力作でもありました。(1)南洋の風物人情の克明描写(2)新鮮で力強くてドツシリしていて、充分玄くろうと人的のその文章(3)必しも古く無いそのトリック(4)持ち重りもちものするような莊そうちよう重ちゆうな作風(5)氣宇広濶な國際的の味、等々々、堂々たるもので、二十枚三十枚の作などに、浮身をやつしている作家などには、真似さえ出来ない立派な作

でした。誰かその中に批評するだろうと、今日迄待っていたのですが、誰も批評をしないので、そこで私は呆れ返つて、鳥渡ちよつとここで書いた次第です。誰もがあのを読まなかつたのか、読んでも価値が解らなかつたのか、前者だとすれば迂濶であり、後者だとすると余りにも探偵小説作家には、批評眼が無いということになります。だが併しか何処かであの作に就ついて、批評をした者があつたのだが、それを私が見落としたというなら、早速頭を下げて了しまいます。従来極きわめて親切に且かつ妥当な批評をして来た、甲賀三郎氏が是これに就ついて、批評しなかつたということを、私には鳥渡受け取れません。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社

2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「新青年」

1927（昭和2）年6月

初出：「新青年」

1927（昭和2）年6月

入力：門田裕志

校正：Julki

2014年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

印象に残った新作家

国枝史郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>